

| | |
|--------|----------------------------------------------|
| 目指す学校像 | 「学び」でゆるやかにつながる「みんなの学校」～多様性と包摂性、それを支える寛容性の実現～ |
|--------|----------------------------------------------|

| | |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 重点目標 | 1 義務教育9年間を見通したカリキュラム・マネジメントによる学びの高度化の推進 2 一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を大切に学ぶ「時間」「空間」「仲間」の充実 3 探究的な学びを地域全体で支えるスクール・コミュニティの実現 4 学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての教職員の育成 |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

| | | | |
|-----|---|-------|--------|
| 達成度 | A | ほぼ達成 | (8割以上) |
| | B | 概ね達成 | (6割以上) |
| | C | 変化の兆し | (4割以上) |
| | D | 不十分 | (4割未満) |

| 学 校 自 己 評 価 | | | | | 学 校 運 営 協 議 会 による 評 価 | | |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 年 度 目 標 | | | 年 度 評 価 | | | | |
| 番号 | 現状と課題 | 評価項目 | 具体的方策 | 方策の評価指標 | 評価項目の達成状況 | 達成度 | 次年度への課題と改善策 |
| 1 | <現状> ○「さいたま市小・中一貫教育」を推進し、一小・一中の地の利を生かして、円滑な接続を図るための取組を行ってきた。 <課題> ○「さいたま市小学校教科担任制」を円滑に実施することで、中学校の指導体制のよさを小学校に取り入れるとともに、小・中の学びの連続性を強化できるようにする。 ○児童の学習観を更新し、「学びを自分事」にすることで、学力の向上につながる。 | 「学びの自律化」の推進による学力向上 | ①日常的に「学び方」「情報活用能力」の習熟を図る授業づくりに取り組む。 ②授業の中で児童が選択する機会を多く設定し、自律的な学習を促進する。 | ・各種学力調査において、「平均正答数別人数割合の全体平均との差」について、上位層のピークと中位層のピークの差を5問以内にすることができたか。 | ・全国学力・学習状況調査において、「平均正答数別人数割合の全国との差」について、国語と算教ともに、上位層のピークと中位層のピークの差が4問(国語14問中:上位層のピーク13問、中位層のピーク9問、算教16問中:上位層のピーク11問、中位層のピーク7問)であった。 ・「つぼみの目」の部活動体験、特別支援学級の共同農作業、小・中合同挨拶運動など、児童生徒が交流する活動を8回実施した。 ・中学生が作成した地域CMの3年生郷土学習での活用など、中学生との交流で得た学びのアイデアの活用事例集を作成することができたか。 | A | さらに中位層が上位層により近づくよう、課題解決のモチベーションが高まるような授業展開を工夫するとともに、児童一人ひとりの学習スタイルに応じた「学び方」を身に付けていくことができる学習活動を推進する。 |
| | | 西原小・中学校の児童生徒が、まるで一つの学校のように交流できる教育活動の実施 | ①児童会と生徒会の協働によるいじめ撲滅キャンペーン等を実施する。 ②西原小・中学校で連携した学校行事等の実施を推進する。 ③市教委研究指定小・中一貫教育研究発表会を開催する。 | ・西原小・中学校の児童生徒が交流する活動を年10回以上実施することができたか。 ・中学生との交流で得た学びのアイデアの活用事例集を作成することができたか。 | ・「つぼみの目」の部活動体験、特別支援学級の共同農作業、小・中合同挨拶運動など、児童生徒が交流する活動を8回実施した。 ・中学生が作成した地域CMの3年生郷土学習での活用など、中学生との交流で得た学びのアイデアを1月24日の市教委研究指定小・中一貫教育研究発表会で発表した。 | B | 「つぼみの目」の取組や児童会・生徒会の活動など、西原小・中学校の児童生徒の交流を継続する。加えて、中学生による小学校におけるボランティア活動を充実していく。 |
| 2 | <現状> ○3～6年生それぞれに自主学習ルームの設置、学校や教室に行きづらい児童のための学習スペース(通称オアシスルーム)の整備が完了した。 ○学校図書館の拡張整備が完了した。 <課題> ○整備した自主学習ルームを活用して、児童の学習不安の解消に資する取組を推進する。 ○オアシスルームの周知を図り、家庭と学校をつなぐ踊り場としての機能を充実する。 ○豊かな関わり合いを通して、多様性を最大限に尊重する雰囲気醸成する。 | 特別な教育的支援を求める児童に対する組織的なサポートの実現 | ①オアシスルーム及び西原支援教室を活用したサポートを実施する。 ②目白大学と連携し、リハ専門職による特別支援学級へのサポート及び教育相談を実施する。 ③特別な教育的支援を求める児童に対するサポートプランを作成する。 ④アシスタントティーチャーや校内ボランティアによる支援体制を整備する。 ⑤スクールダッシュボード(プロトタイプ版)を活用した個人面談を実施する。 | ・オアシスルーム及び西原支援教室の運用マニュアルを作成することができたか。 ・目白大学との共同研究「リハ専門職連携プロジェクト」の成果をさいたま市教育委員会事務局学校教育部特別支援教室に報告することができたか。 | ・オアシスルームまたは西原支援教室を活用した継続サポートは、それぞれ3人程度行っている。今年度の活動実績や市教委の参考資料を踏まえて、運用マニュアルを完成させ、次年度当初から施行する予定である。 ・目白大学との共同研究「リハ専門職連携プロジェクト」は、特別支援学級の継続サポートに加えて、10月から保護者対象の教育相談、2月13日の学校保健委員会での講話を実施した。3月に市教委の特別支援教育室を訪問し、活動の成果を報告する予定である。 | B | 現在、オアシスルームの運用は、管理職とスクールソーシャルワーカー、西原支援教室の運用は、特別支援学級担任とスクールアシスタントが行っている。今後、持続可能な形で安定的に運用をするために、教職員による校内ボランティアも含めた支援体制を整備することが急務である。目白大学との共同研究「リハ専門職連携プロジェクト」は、継続・発展していきたい。 |
| | | 児童会の学校生活改善に係る取組の推進による「児童のリーダーシップ・メンバーシップ・オーナーシップ」の涵養 | ①校長が、継続的に代表委員会に参加し、児童会に対して、学びの「時間」「空間」「仲間」の視点で学校生活改善の取組を依頼したり、進捗状況の報告を受けたりする。 ②ICTを効果的に活用して、学校生活改善の企画の立案、取組の実践、振り返りを行う。 ③児童会の取組を地域に広報する機会を適宜設定する。 | ・「私には学校をよりよくする力がある」と感じる代表児童の割合が、活動前後で20%向上することができたか。 ・児童会の取組で学校が改善されたと感じる児童の割合が80%以上となったか。 | ・12月に実施した児童会による「いじめほくめつクエスト」の活動前後で「私には学校をよりよくする力がある」について調査したところ、肯定的な回答はどちらも100%だったが、より肯定的に感じる児童の割合は、42.9%から31.3%に低下した。 ・学校評価アンケート(児童用)の質問「自分たちの学校や学級は、自分たちでよりよくしたいと思いますか」について、肯定的な回答をした児童の割合は98.1%であった。 | B | 児童会の学校生活改善に係る取組を複数回実施することで、児童が「自分たちの学校は、自分たちでよりよくしたい」「私には学校をよりよくする力がある」という実感を深めることは大切なことだと感じる。多様性への対応や自主性を育むことは、非常に良い取組である一方、学校だけでなく、家庭や地域を巻き込んだ環境整備が必要なため、長期的視点で継続して欲しい。 |
| 3 | <現状> ○西原小・中学校合同のコミュニティ・スクールが円滑にスタートした。 ○開校当初より、郷土学習として取り組んでいる岩槻の人形づくりについて、総合的な学習の時間(STEAMS TIME)に位置付けた。 ○児童と地域の方が気軽に交流できることを目的とした「コミュニティルーム」を設置した。 <課題> ○学校運営協議会において、熟議を深める。 ○整備した学習計画や学習環境に基づき、実践を充実する。 | コミュニティルームをプラットフォームとした、児童と地域の方の交流や学び合いの機会の継続的な設定 | ①コミュニティルーム内の環境整備を進めるとともに、運用ルールを作成する。 ②コミュニティルームの設置について、地域関係者に周知する。 ③コミュニティルームを活用して、地域の方同士の交流や、児童と地域の方同士の交流を実施する。 ④地域の方による学習ボランティア発足に向けた検討を開始する。 | ・地域の方同士または児童と地域の方との交流会を年3回以上実施することができたか。 ・地域の方による学習ボランティアを発足することができたか。 | ・コミュニティルームは、日常的にチャレンジスクール実行委員会や図書ボランティア等が作業や会議に使用している。1月に児童と学校安全ネットワークの委員にも利用説明会を行った。2月19日の業間休みから週2回のペースで児童の利用を開始するので、地域の方との交流の機会を意図的に設定する予定である。 ・第3回学校運営協議会において、学習ボランティアの発足に向けた提案を行い、発足に向けたルールづくり等を開始する。 | B | コミュニティルームの運用にあたっては、容易な予約や防犯も含めたより一層の安全確保を図る必要がある。地域の方による学習ボランティアを発足し、放課後や長期休業中の学習支援の実施を目指す。引き続き、コミュニティルームを拠点とした地域の方同士または児童と地域の方との交流会を仕掛けることで、学校に日常的に地域の方が出入りする状況を実現していきたい。 |
| 4 | <現状> ○教員免許更新制の発展的な解消に伴い、教職員のキャリアステージやライフスタイルに応じて、研修により一層主体かつ計画的に取り組むことが求められている。 <課題> ○学校課題研究のステージを理論研究から実践研究に進め、教科別チームによる小・中相互授業参観を繰り返すことで、実践的指導力の向上を図る。 ○ICTの活用により日々蓄積される教育データと教職員の経験を掛け合わせることで、教育活動の更なる改善を目指す。 | 一人1教科選択制による「学び合う」学校課題研究の実施 | ①各教員が研修を深めたい教科を選択し、西原中学校の教科担任と合同のチームを組織して、相互授業参観や教材研究を行う。 ②「さいたま市小・中一貫教育」の推進に係る兼務教員が継続的に授業に参加することで、中学校のもつ実践的な知識や方法論を導入する。 ③教員一人ひとりが自身の課題意識に応じた個別の研究計画を作成し、互いの研究の成果や課題を学び合う機会を継続的に設定する。 | ・教員一人当たり年3回の公開授業と年6回の授業参観を実施することができたか。 ・教員対象のアンケートで「深く探究したい教科がある」と回答した教員の割合が90%以上となったか。 | ・教員一人当たり年2回の公開授業と年3回の授業参観を条件とした学校課題研究の実施に加えて、市教委の指導訪問における全員授業公開や年次研修(8人対象)における複数回の授業公開を行った。2月15日に各教員が行った授業実践の発表会を行う予定である。 ・学校評価アンケート(教職員用)の質問「一人1教科選択制による『学び合う』学校課題研究の取組により、『深く探究したい教科』を見出すことができましたか」について、肯定的に回答した教員の割合は84.0%であった。 | A | 教職員一人ひとりの専門性や強み、キャリアステージやライフスタイルは多様であり、各自が必要とする研修内容も異なっている。中央教育審議会において、児童の学びの姿と教師の学びの姿は相似形と指摘されており、教職員自身がテーマを設定して探究的に学ぶ機会の確保は、今後ますます重要となる。各教職員が個別最適かつ協働的に研修を深めていくためのシステムを構築し、資質・能力の向上を図っていく。 |

| |
|---------------------|
| 学校運営協議会による評価 |
| 実施日 令和6年2月13日 |
| 学校運営協議会からの意見・要望・評価等 |